

(別紙2)

## 論文審査の結果の要旨

氏名 野上 元

本論文は、近現代日本における「戦争体験」がいかなる言説上の条件の中で「書かれてきたのか」という点に焦点を絞り、「戦場」の経験と「書くこと」の関係を、日露戦争期から1960年代までの射程において歴史社会的に探究した論考である。

序章では、これまで「戦争」を主題にしてきた主な社会学的論議が検討に付され、本論の視点との違いが明確にされる。論者によれば、総力戦体制論を含め、戦時体制を日常の社会編制との連続性において捉えようとしてきた「戦時動員」論は、戦争そのものの限界状況や「復員」の契機を正面から問題にできないという難点を含む。他方、近年盛んに語られている「戦争の記憶」論は、「想像の共同体」論などと結びつきながら記憶することと集合的主体形成の関係を捉えたが、そもそもそうした「記憶」がいかなる歴史的な媒介を通じて「書き込まれた」のかという点に十分な注意が向けていない。これらの近年の潮流に対して論者は、今一度「戦争体験」そのものに照準することの重要性を強調し、これを実体的なものとしてではなく、「書くこと」を通じて社会的な事実となり、集積されるものとして、メディア論や言説分析、情報学的な視点を導入しながら考察しようとする。

以上のような方法的視座から、第一章では、日露戦争以降、軍人や従軍記者がどのように「戦争を書く」主体になっていったのか、いかなる「書くことをめぐる方法意識」を身につけていったのかが、森鷗外や田山花袋から石原莞爾までのテキストを例に考察されている。第二章では、1945年以降、復員してきた兵士たちが次々に戦争文学を書き始める状況に焦点が当てられ、「兵士が作家になる」過程において、戦争体験が言説の制度としての文学とどのような矛盾を含んだ仕方でも結合していくのかが、大岡昇平を中心的な事例として考察される。第三章では、「戦争体験を書くこと」が草の根的なレベルで広がっていく1960年代以降に焦点が当てられ、『きけわだつみのこえ』から様々な空襲体験記、学童疎開記録運動までの流れを視野に収めつつ、論者自身がインタビュー調査を行なった長野県栄村での「戦争体験記」の書かれかた（と読まれかた）について考察がなされている。

以上のように本論文は、一貫して近代における「書くこと」の重要性を分析の中心軸に据えながら、「戦争体験」というテーマに新しい視角から綿密に迫っている。論述がやや断定的になりすぎたり、抽象概念の説明が不十分であったりする箇所があるものの、熟成された問題意識を基礎に、歴史社会学と社会情報学が重なる領域でこれまでにない独創的な視座を提示した点は高く評価できる。よって審査委員会は、本論文が博士（社会情報学）の学位を授与するに値するとの結論に達した。